

巡礼者の町：川口と吉田

15 世紀後半になると、富士山にはますます多くの巡礼者が訪れ始めました。川口と吉田という富士山北麓の 2 地域は、これらの巡礼者の信仰的・実地的ニーズに応じて発展しました。

河口湖の北岸に位置する川口は、すでに甲斐国（現在の山梨県）と富士山南側の駿河国と相模国（現在の静岡県と神奈川県）を結ぶ甲斐路に設置されていた駅家でした。この経路で富士山に向かう巡礼者にとって、富士山が視界に入る前の最後の難所、御坂峠を越えた先にある川口はありがたい休憩所でした。こういった旅人に役務を提供するため、富士山巡礼者を案内する「御師」と呼ばれる信仰指導者たちの小さなコミュニティが生まれました。16 世紀までには、これらの御師たちは富士信仰を広めるため全国をまわっていました。

富士登拝の際に川口を拠点として利用した巡礼者は少数でした。ほとんどは、16 世紀に御師たちが巡礼者への宿泊場所を提供し始めた「富士山への玄関口」である吉田から出発しました。この町が現在の場所になったのは、1572 年です。春先の融雪による土石流の危険を避けるため、住民は元の位置から 500 メートル西に新しい大通りを敷設しました。この新しい大通りは富士山に向かって真っすぐ伸びており、側道には御師の宿場が軒を連ねていました。最盛期には 80 人以上の御師たちが吉田で巡礼者たちに宿泊場所を提供していました。しかし、その後富士講の信者数が減少したため御師の需要も減り、今では数軒の元宿場が佇んでいるのみです。